

大阪府立高等学校エンパワメントスクールへのpir導入とその課題

本間直樹、金和永

第1部

フィロソファー・イン・レジデンス (pir)

本間直樹

1. フィロソファー・イン・レジデンスの概要

- ・「フィロソファー・イン・レジデンス」(philosopher in residence: pir)とは、哲学者が一定の期間学校などの組織に継続的に関与し、教員や生徒(さらには保護者や地域住民など)とともに学校・教育にかかわる諸課題について対話し、解決に向けてともに動き出す活動である。「哲学者」には、知識や専門技術よりも、対話し、ともに考えることを体現する〈生き方〉〈姿勢〉〈態度〉が求められる。pirとしての組織への関与は多面的・多層的であり、具体的な活動のあり方も多様である。
- ・pirの活動は学校に限られることなく、組織滞在型の「**哲学相談**」(philosophical consultation)として一般的に考えることができる。(哲学相談は、対個人/対組織にひとまず分類しておく分かりやすい。)たとえば学校の場合、哲学者は教員とともに教案を考案し、授業に参加し、教員とともに授業を進めることもあるが、それだけでなく、生徒たちに交じって授業をともに体験し、生徒の目線で授業について参与観察を行う。また、個々の授業に関与するだけでなく、教員間のコミュニケーションを助け、教員集会(研修会)、保護者会を主催するなど、さまざまな立場を横断しながら、学校におけるコミュニティ(探究のコミュニティ)の醸成に貢献する。(学校以外の組織、たとえば病院、コミュニティセンター、会社などでも同様である。)
- ・哲学者の役割は**コンサルタント**(相談役)であるが、従来の組織コンサルティングと以下の点が異なる。通常のコンサルタントは、専門の見地から組織に関する情報を収集し、組織を外から観察して組織の問題点を指摘し、改善案を作成する、あるいは、業務外に研修などを行い、組織構成員の教育を行う。それに対し、対話と協働を行うpirは、常に組織に横断的に参与・関与し、組織内に生じがちな分断やセグメント化を解消していく(フレイレのいう意味での)教育であり、対話であり、コミュニケーションである。(技術や知識の移転=非対話、非教育、非コミュニケーション)(パウロ・フレイレ『伝達か対話か』)
- ・哲学者は組織の成員とともに、対話に向けたさまざまな努力をおこなう。**対話**とは、方法や手法でもなく、議論の一形態でもない。対話は基本的に一連の**問答**によって成り立つ。それは、対話者が自己の〈観察〉を通して、〈驚き〉や〈発見〉を得て、対話者から学び、対話者とともにつくっていく身体空間である。相手を変えようとしたり、操作したりするなどといった、他者を対象に変えるいかなる意図が介在する場合も、対話は成立しない。組織のなかでひとびとが「非人間化」されている状態から人間へと回復するために対話は必要不可欠なものである。
- ・「**セーフな**(=解放された)**探究のコミュニティ**」は、対話をすすめる理念と実践であり、学校の教室のなかで教育の目的のもとでなされることが多い。「セーフティ」とは、解放されたあり方、自由な態度を

指している。しかし探究のコミュニティは、学校教育に限定されない本来の意味での教育活動として理解されるべきである。それはたんなる授業手法ではなく、哲学者を中心とする対話の時空間であり、構成員や形式を問わず、いつでもどこで始めることができる。セーフな探究のコミュニティは誰にとっても必要なものである。

2. PIRの特徴

- ・ **エンパワメント**：pirは個人と組織の双方に働きかけてエンパワメントを促す活動である。エンパワメントを促す、というのも、エンパワメントはけっして外から与えられる力ではなく、当事者の連帯と協力を通して成し遂げられるものであり、哲学相談やpirはそれを側面からケアするものと考えられるからである。またpirは個人のみを対象にするのではなく、あくまでもコミュニティ形成に主眼を置く。コミュニティのなかでの個人を尊重することで、結果として個人のエンパワメントにつながる活動を促す役割も持っている。
- ・ **小さな変化**：コミュニティとは関係であり、それは個人と組織の両方に関わっている。組織は、たとえば学校であれば教師、生徒、保護者という成員とそれらの役割によって定義されることが多いが、pirが携わるコミュニティ形成はそのような成員や役割によって規定されるわけではない。むしろひととひとの間に結ばれる関係に着目し、この関係の自覚や発展から個人と組織のつながりを見直す。pirは小さな変化からスタートして、次第に組織の改善とエンパワメントにあたることができる。たとえば、数人のスタッフ間、教員間のコミュニケーションを助けたり、会議や授業のなかの一場面での相互理解に関与するなど、対話がなされる機会をわずかでも導入し、当事者たちがじぶんたちの置かれている状況を認識し、相互理解を深めるのを助けることができる。
- ・ **組織全体での理解と取り組み**：pirを進めるためには、組織全体での理解と取り組みが不可欠である。そのため哲学者が時間をかけて組織のなかで受け入れられ、いっしょに活動する仲間であるとみなされることが重要となる。もっとも「哲学者」という名称は一般には使われておらず、そのままでは理解の難しいことばでもあるので、表立って哲学者を標榜する必要はない。組織に受け入れられるための名称や仕方は関与する組織に応じて決められる。名称はなんでもあり、関わりは組織の管理者を含めたさまざまな組織のメンバーに対して相談者として振る舞ったり、ボランティアに組織のなかで求められる役割を担ったりすることから始められる。いずれにしても特定の役割に限定された「専門家」というレッテルをできるだけ回避し、むしろ「何でも屋」と呼ばれるくらいの多様な役回りを演じたほうが有効な場合が多い。じっさい、組織のなかのさまざまな「雑用」に関わるのが、組織に関与することの重要な入り口となる。雑用こそが組織やメンバーを深く知るための現場といってもいいだろう。
- ・ **チーム**：関与する組織の規模によっては、pirを単独で実践するのが困難である場合もある。また、たとえば大学院生などがpirに参加する場合、pirの経験もひとによってまちまちであるので、複数のチームで取り組むのが望ましいと考えられる。複数の観点からpirに取り組むことにより、情報入手の経路も複数になり、多角的に組織を観察できることから、独善的な判断に陥ることを避けることもできる。（もっとも現場できめ細やかに対話をもっていれば「独善的な判断」に陥ることは原理的にはありえない。）
- ・ **持続可能な活動**：pirは単発の関わりではなく、中長期的な組織の関わりをなかで展開される。そのため、pirが持続可能な活動となるかどうか、最大の問題点といってよい。組織内にpirをよく理解し、積極的に協力するメンバーがいることは不可欠であるほか、哲学者が組織に関わるための経費負担、対価をどうするかについても、（活動を続けながら）整備していく必要がある。

- ・ **pirの教育プログラム**：pirを実践する者を教育することも大きな課題となる。たとえば大学等の授業で少なくとも2年間（15時間×4回）対話を学び、加えて実地活動に2年以上参与すること経験が必要であると考えられる。また組織のメンバー、たとえば学校教員が大学院に入学し、対話を学ぶことも可能である。

3. 大阪府立高校エンパワメントスクールでのpir

大阪府立長吉高等学校での活動については第2部で詳しく扱うとして、ここではこの活動でのpirの要点のみを簡潔に記す。

- ・ **pirの導入**：2015年度より、大阪府立長吉高等学校では大阪府より「エンパワメントスクール」の指定を受け、義務教育段階の学習の学び直し、さまざまな背景により学習が困難な生徒たちをサポートする取り組みが始められた。担当高校教員からは、生徒のエンパワメントを目的とする新しい授業科目（「産業社会と人間」）を設定し、その授業に「セーフな探究のコミュニティ」の考え方やスタイルを導入したいという希望が寄せられた。pir導入としては、大学教員および大学院生がこの授業科目の補助者、相談役として授業に関わるほか、教員研修会の講師として教員全員に「探究のコミュニティ」にじっさいに体験してもらうなど、学校全体がエンパワメントの意義を理解し、これに取り組むための準備を行うことが出発点となった。（詳しくは第2部を参照）
- ・ **取り組みの方針**：基本的には授業「産業社会と人間」を軸として関わっている。授業内容については、哲学者側から「セーフな探究のコミュニティ」形成のための基本的な考え方を示すほかは、担当する教員自身が教案作成することにより重点をおき、担当教員による原案に対して「セーフな探究のコミュニティ」の観点から改善案を提案し、それをもとに教案を修正し、じっさいに授業に臨む。授業では哲学者は「授業補助者」というポジションをとり、あるときは生徒たちに混じって教案をじっさいに体験し、あるときは教員の代わりに授業を行い、教員にも教室内のコミュニティのメンバーとして対話に参加してもらう機会を提供した。授業を行った後も、担当教員とともにすぐに課題を洗い出し、なされた教案への反省と次の教案作成に活かすための話しあいをもっている。
- ・ **主要な課題**：2015年度の関わりのなかでさまざまな課題が浮かび上がってきたが、なかでも大きなものは教員間のコミュニケーション不足である。「産業社会と人間」を担当する教員4名のあいだでも、なかなかミーティングをもつ時間がとれず、教案を十分に検討するための絶対的な時間が不足した。しかし、pirの観点からすれば、これは「解決すべき問題」ではなく、教員たちの置かれている現実であり、最優先の課題は教員それぞれがこの状態をどのように考え、どの方向にもっていきたいと考えるかを知ることが課題となる。教員が多忙のあまり、教員間のミーティングにも十分に参加できないという事態は、他の初等中等教育機関にも共通する大きな問題であり、pirの活動で容易に解消するものでもない。（また、このように学校間に共通する問題を確かめ、可能であれば個々の学校の枠を超えて考える場を用意することもpirの課題としてあげることができるだろう。）またpirの関わりとしては、教員どうしがミーティングをもつことが難しいとすれば、個々の教員への関わりを深め、授業の場も含めて生徒と教師のコミュニケーションを助け、それを通じて教師のニーズをききとっていくことが必要となる。
- ・ これに関連して、「エンパワメントスクール」という新しい課題について考えるために、年に2回開催される「教員研修会」（これには50名ほどの教員が参加する）のほかに、小規模の教員の集まりをもち、教員の置かれている現状について話しあう機会をもった。

第二部

大阪府立長吉高校における授業づくりの実践から見た現状と課題

金和永

1. はじめに

大阪府立長吉高校は、大阪府大阪市平野区に所在する府立高校である。長吉高校は、2001年度に全日制単体制高校へ改編されたのち、2014年度まで普通科を置く高校であったが、2015年度より「エンパワメントスクール」となり、総合学科を置く高校として新しいスタートを切った。「エンパワメントスクール」は大阪府教育委員会の施策であり、「エンパワメントスクール」に指定する府立高校において、義務教育段階の学習の学び直しなどをつうじ、中退や不登校に陥りがちである生徒をサポートするものである。長吉高校では制度の移行にともない、さまざまな変化が起きている。その過渡期にある同高校のもっとも大きな課題は、それらの大きな変化にどのように対処し、新しく長吉高校を作っていくか、ということにあるといえる。

臨床哲学研究室に所属する筆者を含めたメンバーは、2015年度から、長吉高校で開講される『産業社会と人間』の科目に、長吉高校の教員と共同で授業担当者として関わることとなった。

以下ではわたしたちが担当する授業の様子も含めて、わたしたちの関わり方、およびそれによって見えてきた限りでの具体的な課題を報告する。

2. 関わりの経緯

大阪府教育委員会によれば、エンパワメントスクールでは「社会人として必要な「基礎学力」「考える力」「生き抜く力」」の三つの力を育むとされている。そのなかでも、「考える力」と「生き抜く力」の部分に相当する学習を行なう時間として、「エンパワメントタイム」と呼ばれる時間割上の区分が設定されており、『産業社会と人間』の科目は、このエンパワメントタイムに実施される授業の一つである。

上記のような長吉高校の授業に取り組むことになった経緯について、まず簡単に述べておく。報告者は2014年8月、長吉高校で長年教員を続けておられ、現在私たちが担当している授業の取りまとめを担っている森山玲子さんから、長吉高校のエンパワメントスクールへの改編と、それに伴って新たに設置される「産業社会と人間」という必修授業の内容について相談を受けた。その際、p4c hawaiiでとりくまれているSafe Community of Inquiryの実践に取り組んでいる臨床哲学との協力で、新しい授業を創っていくことについて話し合った。

同年12月、実際に授業を始める次年度にさきがけて、長吉高校の教員研修で、実際にp4c hawaiiのスタイルで行なった。並行して、臨床哲学に所属しているメンバーで、この新しい取り組みに関心のある人に声をかけ、何度かミーティングを重ねて、長吉高校の現状を共有するとともに、関わり方の理念などについて相談を重ねた。

2015年の1月ごろから、具体的に授業内容を詰める作業に入り、大阪府教育委員会に提出を求められていた年間の授業プランの作成を通じて、授業の理念や目標について意見を交わし、今年度からの授業に臨むこととなった。

2015年度は、報告者を含めて4～5人が、ほぼ毎週の授業のさいに長吉高校に足を運び、授業への参加、担当の先生との対話を続けた。また、2015年の6月と12月には、教員研修において改めて、Safe Community of Inquiryを応用した研修を実施した。

3. 活動の概要と哲学者としての役割

3. 1. 授業

3. 1. 1. 参加の形態

「産業社会と人間」は1年次の計7クラス、週一回、45分2コマで実施される。この授業を、担当教員と共同で、特別非常勤講師という形で担当している。

2015年度1学期の授業は、おもに先生が中心となって作成した「ワーク」を実施し、その後そのワークの経験について、短い時間全員で対話する形式で行われた。対話は、子どもの哲学のなかでも、とくにハワイで実践されている、Safe Community of Inquiry（セーフな探求の共同体）を目指す実践を参考にして実施した。また、ワークは「自分について考える」という目標を柱としていた。

2学期は、1学期の反省も踏まえながら、「自分」からすこし輪を広げた複数人での共同作業に挑戦することが目標として設定された。具体的には、保育園・幼稚園での読み聞かせを最終的なゴールに据えた、グループでの絵本作りや、学校で販売されているお弁当のあたらしいメニューを考えるワークを行なった。5～6回の授業を通して作業をするため、1学期のように、円になって経験を振り返る時間を毎回設けてはいない。

また、授業開始前と終了後に、適宜先生を交えたミーティングを簡単に行ない、次回の授業内容の相談や、生徒のふだんの様子や気づいたことなどを共有している。

3. 1. 2. 授業での役割

「産業社会と人間」は、そのタイトルから想像されるような、社会や人間についての知識を生徒に移転するタイプの授業ではない。この授業はエンパワメントタイムに位置づいており、従って、エンパワメントタイムが担う、「考える力」と「生き抜く力」に関わる授業となる。とくに「考える力」については、「自尊心を高め、自分の意見や考えを持つとともに、異なる意見も尊重しながら課題解決していく力」と説明されており、ここに「対話」の授業の役割が求められていると考えられる。

このような目的をふまえて、「産業社会と人間」においては、自分と他者を尊重できるようになることや、自分自身について知り、将来の進路選択や生き方を考えられること、という、個人及びコミュニティのエンパワメントが指向されているといえる。これがひいては、前述した制度の移行に伴う課題のうち、大きなものの一つであるクラス内の人間関係においても、自他の尊重をベースにして、コンフリクトに自分たちで対処し持ちこたえるコミュニティに寄与することを目指している。

1学期に主に実施していた、自分について考えるワークとコミュニティボールを使った対話は、学校内での、生徒同士や生徒と先生という関係のあり方を可視化することになった。同時に、長吉高校の生徒たちが学校内外で生きている現実の課題の一端も、ワークや対話のなかで現れてきたと言える。また、自分自身を、問いを通じて振り返り、それを他者と共有することを目指した授業の中で、私たちはできるかぎり、それぞれの生徒が自分自身と他者について発見し、できるならばそれを表現する、というプロセスに何らかの形で参画してもらうため、円やコミュニティボールといった手法にもとらわれず、場のセーフティを大切にできる授業の形を考え、提案してきた。

2学期に実施しているグループワークでは、私たちの役割は、生徒たち自身の自発的な動機に基づいた多様な創作のありかたや表現を肯定し、励ましていくことにあると言える。特に絵本作りのワークにおいて、多様な表現の手段を提示し、表現を内側から動機づけていくために、生徒、グループ、また先生に関わってきた。

以上のように、現在私たちが授業内で果たしている役割は、学校現場で発生している様々な関係を可視化すること、参加している生徒のさまざまな表現を動機づけること、そのために授業の目標を明確にし、手段を提案することであると言える。

3. 2. 授業外での活動

3. 2. 1. 活動のありかた

私たちは授業前後に、授業を担当する先生との当日の進行の打ち合わせや、その日の生徒の様子・状況を話しあい、今後の授業のデザインを先生と一緒に考える。また、担当の先生に集まってもらい、授業の印象や困難に感じる事、悩みをシェアする時間を作っている。

さらに、授業のデザインや生徒の情報共有といった実際の授業に関わることを超えて、先生たちの働き方や授業の仕方、生徒の授業への参加の仕方、学校の雰囲気などにも目を配り、先生・生徒の負担に気をつけながら、理念や目標を提案したり、校内でそれを考える場を設けることも視野に入れている。

その他、臨床哲学から授業に参加する人のコーディネート、日程調整や事務的連絡を行なっている。

3. 2. 2. 目的

長吉高校は現在、増大する職務によって、教職員間のコミュニケーションや、新しい体制への変化にまつわる互いの困難や関心、教育の目標について、十分な意思疎通ができていない状態にある。担当する授業だけではなく、教職員同士の助け合いや、互いの仕事についての理解、また実践の目標などをみんなで考えるといった、長吉高校の教員コミュニティのエンパワメントが必要とされている。私たちは、授業を担当しない日でも現場を頻りに訪問し、授業担当の先生を始めとする教職員と話をしながら、学校全体のエンパワメントのための助力を模索している。

以上のような授業内外でのわたしたちの関わり方と役割は、たしかに授業補助者としての側面を持ち、生徒にとっては先生のうちの一員でもある。しかし、授業の内容や目標を先生と相談する中で作るだけでなく、先生同士のコミュニケーションをとる場を作ることを志向し、授業に関しても学校全体への関心を持ちながら、授業の提案をし、相談をしていくことを行なっている。このような関わり方と役割は、授業補助者として迎え入れられつつも、それを超えて学校全体に関心をもちながら関わる、という意味で、PIR的な側面を持っていると考えられる。

4. 活動によって見えてきた、本授業および長吉高校の現状と課題

2015年度、わたしたちがかかわった活動を通じて、明らかになってきた長吉高校の現状と課題は、おもに次の4つであると考えられる。

a. 生徒間のコンフリクトや、授業中に授業を妨害してしまう生徒への対応、授業やp4cの態度との一貫性の問題。

生徒は学校を自身の生活の一部として生きている。学校は、一日の半分以上を過ごす場所であり、さらには一年を通じて生徒たちの予定や目標を定める。それにとまって、学校はそこに集う生徒の人間関係を大きく規定する。学校やクラスのなかでの関係性の発生や変化が、生徒の生活全体にとって大きな関心であり、それは学校に通い続ける動機にもなれば、そこででの出来事や関係性が、生活そのものを困難にさせることもある。学校は学習のためだけではなく生徒にとっての生活空間である。

2015年度にわたしたちが実施した授業は、先生から生徒へ知識を移転するのではなく、生徒の参加を重視し、クラスに属するメンバーや先生、わたしたちの相互のやりとりが発生すること、それが学習へとつながることを目標にデザインされた。このようなスタイルの授業や環境に慣れていない生徒は多く、どのように振舞ってよいかわからずに困惑したり、不安を感じている生徒も少なくなかった。そのような慣れない環境に加えて、生活空間としての学校・クラスにおける生徒同士の人間関係が、授業内でのやりとりを大きく規定することになる。互いによく思っていないグループ同士が授業内で対立しコンフリクトが顕在化する場合や、他の人を気にせず気の合う人と話し続け、先生や私たちを含めた他のメンバーの話が聴こえなかったり、次の作業に移ることが出来ない、という状況はよく起こった。

授業内でクラスに潜在するコンフリクトが表面化することそれ自体は、ポジティブな側面も持つ。しかしながら、当座その時間に授業を実施するにあたっては、当初に予定した内容を大きく変更せざるを得ないことになり、これは授業を実施する側の負担を大きくする。また生徒にとっても、あまりにも騒がしかったり、

不安や怒りなどの感情が表に出ている状況は、授業に参加するモチベーションを削ぎ、積極的に授業に参加することが難しくなっていく。

このような状況にたいして、通常の授業では先生は校則を執行することによって秩序を守るという仕方での対処ができる。具体的には、「授業妨害」としてあらかじめ校則によって定められた行為を指摘し、何回かそれが重なった場合にクラスから退室させ、別室指導とする、などである。しかし『産業社会と人間』の授業では、クラスをひとつのコミュニティとして、互いにケアしあう場づくりを重視するため、安易にルールを執行して教室の秩序を守ることよりは、どのような行為がコミュニティにおける互いのやりとりや参加にとってより望ましいかを考えることのほうが授業の目標により適っているため、先生も私たちも、教師や「授業担当者」としての注意や指導ではなく、たがいに自覚を促す方向へと向かおうとする。このやり方には時間がかかり、また授業時間中ずっと状況が良くならないということもある。このことについて、担当する先生の中には普段の授業と『産業社会と人間』の授業とでは、態度を大きく変えていると感じ、ルールを執行するべきか否かという問題が、先生にとってのジレンマとして経験されている例もあった。

b. 生徒たちが直面する学校内外の課題に、私たちが授業を通じてどのようにアプローチできるのか。

長吉高校に通う生徒のなかには、学校内外において、貧困や仕事、家庭環境、外国にルーツがあることにまつわることで、日本社会が持つ構造的・社会的問題に直面しているひとが少なくないということが、授業での生徒の話などから伺えた。わたしたちは、いわゆる「支援者」として長吉の人々とかかわることはできないが、授業で何らかの形で、彼・彼女たちが直面している状況について考える機会をつくりたいと考えている。あるコミュニティが、自分たちにとって本当に考えるに値するテーマを発見していく「生成テーマ」を重視して授業を作ることを模索していかなければならないだろう。

c. 実施される「ワーク」とp4c Hawai'i の精神にのっとった探求のコミュニティの試みとの関係が、双方の授業担当者にとってあいまいだったこと。

多くの「ワーク」を実施し、それぞれについて、おおまかな目標を立てていたものの、それがどのような学習につながっているか、授業全体におけるワークの位置づけや、授業目標とワークの関係について、私たちも先生方もはっきりとした説明を持たなかったことがあった。

主な原因を2つ挙げる。まず、学校全体が多忙な状況の中で、実施するワークの目的や方法について、十分に話し合う時間を持てなかった。毎回変わるクラスの人間関係やその日の状況に対応しながら、初めて実施する授業を毎週行なうというてさぐりの状況のなかで、なんとかその日の授業を実施することで手一杯となりがちだった。

いまひとつは、われわれが授業を提案するにあたって、Safe Community of Inquiryの理念を長吉高校における授業として具体化することは手探りの試みだったため、大きく方針を転換するなど、当初の計画どおりには全くいかなかったことがある。そのなかで、直近の授業についてとりあえず提案するという状況も多くなり、全体の目標との関係、授業の流れを余裕を持って考えることは難しかったと言える。

これらの反省を踏まえて、2016年度は、改めて授業全体の目標を先生とのあいだで明確にしたうえで、2015年度に一度実施した授業を改善する形で、先生にとっても余裕のある授業の作り方を重視している。

d. 「エンパワメントスクール」とはどのような学校なのか、長吉高校における「エンパワメント」とはどのようなものであるべきかということがまだ判明でないこと。

長吉高校がエンパワメントスクールに指定された経緯については触れないが、大阪府教育委員会が推進する「エンパワメントスクール」制度の行政的な目標や言葉の定義とは別に、この制度が長吉高校にもたらしている変化は数多くある。長吉高校がどのようにこの制度を利用できるか、「エンパワメント」という理念は長吉高校ではどのような意味であるかということが、外部から訪問しているわたしたちにとっては見えずらい。また、複数回行なった教員研修で、教員同士が円になって話をするという形式が学校のニーズでもあったのは、多忙な中、先生同士で学校全体について考えを話しあう時間がないという状況があることからだっ

た。これらのことから推測するに、「エンパワメント」の長吉高校における意味は、先生方それぞれが考えを持ち、授業に反映させているという状況なのかもしれない。わたしたちの関わる「産業社会と人間」でも、生徒のエンパワメントは確かに目指されているのだろうが、「エンパワメント」という言葉について、先生方と話し合い考える機会はいまだ少ない。まずはわたしたちの関わることできている人々と、「エンパワメント」について具体的に考える機会を持ち、授業にも返していくことが必要だろう。